

史料紹介

『看聞日記』現代語訳（六）

蘭部 寿樹

本稿は、室町時代の皇族・伏見宮貞成（二三七一〜一四五六）の日記『看聞日記』を現代語訳したものである。本稿の底本は、小森正明代表校訂『凶書寮叢刊 看聞日記』一（明治書院、二〇〇二年）である。難しい語などには※の印を付け、その条の末尾に註を付けた。また、日記原文には改行がないが、訳文は内容に応じて適宜改行した。なお、敬語についてはやや不自然な表現があるが、当時の伏見宮貞成の微妙な立場を勘案した結果である。

- 現代語訳（一）〜（三） 応永二三年（一四一六）分 『米沢史学』三〇号・『山形県立米沢女子短期大学紀要』五〇号・『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』四二号（二〇一四〜一五年）
- 現代語訳（四） 応永二四年一月一日から四月二九日まで。『米沢史学』三二号、二〇一五年
- 現代語訳（五） 応永二四年五月一日から八月二八日まで。『紀要』五一号、二〇一五年

本稿で訳出したのは、紙幅の都合上、応永二四年九月一日から二月三日までの分である。『看聞日記』を現代語訳した経緯などについては、（一）を参照されたい。

本稿により、『看聞日記』の面白さを少しでも多くの方に知っていただき、さらに原文に当たってもらうことができれば、本望、これに

すぐるものはない。皆様からのご示教・ご叱正を切に望む。

【主要参考文献】

- 横井清 『室町時代の一皇族の生涯』（講談社学術文庫、二〇〇二年、初出一九七九年）
- 位藤邦生 『伏見宮貞成の文学』（清文堂、一九九一年）
- 小森正明代表校訂『凶書寮叢刊 看聞日記』一〜七（明治書院、二〇一四〜二〇一四年）
- 村井章介 「綾小路信俊の亡霊をみた―『看聞日記』人名表記方寸考―」（同『中世史料との対話』、吉川弘文館、二〇一四年、初出二〇〇三・二〇一四年）
- 松岡心平編『看聞日記と中世文化』（森話社、二〇〇九年）
- 松蘭斉 『看聞日記』に見える尼と尼寺（愛知学院大学人間文化研究所紀要『人間文化』二七号、二〇一二年）
- 同「室町時代の女房について―伏見宮家を中心に―」（愛知学院大学人間文化研究所紀要『人間文化』二八号、二〇一三年）
- 田代博志 「山城国伏見荘における沙汰人層の存在形態と役割」（『中近世の領主支配と民間社会』、熊本出版文化会館、二〇一四年）

## 三木善理の神主復職

(応永二十四年) 九月一日、晴。夕方に雨が降った。いつものように月初めのお祝いをした。さて、奈良にいる鹿苑院主から書状が来た。『三木善理の罪については、後日、判断するつもりだ。御香宮祭祀についてはひとまず三木善理の神主復職を許して、神事をやらせてみてはいかがだろうか』と、室町殿は私を呼び寄せて、直に仰った。室町殿がこのようなお気持ちでいらつしやるので、三木善理の神主職についてはひとまずお許しなさったほうがいいでしょう」ということだった。だいたいそんな所だろうと予想してはいたが、やはり驚いた。しかし、「そのようなお口添えがあるからには、祭礼の奉仕に関してだけは許しましょう」と返事をしておいた。

ただし今夜の御香宮神輿巡行には、新任の神主三木善国にお供をさせて、無事に終了した。ただ実際には、善国の幼児が代官としてお供をした。獅子舞が伏見宮家に来ないのはおかしいことだ。昼頃から、体調を崩した。

マラリアであるのは、間違いないところだろうか。それで神輿巡行を見物しなかった。

## マラリア再発

三日、雨が降った。マラリアが再発した。朝早く授書記にマラリアを治してもらったが、また発作が起きた。もしかしたら治りかけているのかもしれない(※)。少ししたら、治った。

室町殿が奈良から京都へ戻るといふ。道すがら、大光明寺へ少しの間、立ち寄られたらしい。

※「もしかしたら治りかけているのかもしれない」：原文は「ただし

影か」とある。

四日、時雨が時々降り、雷が少し鳴った。田向三位が京都へ出かけた。三木に関する訴状を鹿苑院主や富樫満成らへ提出する使者として出かけたのである。

御香宮新神主の幼児が白の狩衣姿で、一献のお酒少々を持って来た。三木善理の神主復職が決まった以上はしばらくの間ではあるが、まずは神主就任のお礼に来たという。神妙である。扇などを与えた。護符と桃の枝のマラリア落とし

五日、晴。今日は、マラリア発作が起こる予定の日である。退蔵庵の僧が秘術を施しますと言つて、マラリア落としの祈禱をしてくれた。午前三時に東の方角の井戸水を汲んで、護符を呑み込んだ。また桃の枝で身体中を祓った。その効き目があったのだろうか。今日の発作は起きなかった。

六日、晴。田向三位が帰ってきた。鹿苑院主や富樫らに三木一族の罪状を詳しく話してきたという。「いい加減にはしません。今日明日中に室町殿へお話しします」とのことだった。

三木善理一人のことについては室町殿の意向があるので、伏見荘へ帰住するのはしかたがない。でも善理以外の三木一族が伏見荘内に入りする事は認めないと、はつきり鹿苑院主らに申し入れた。

## 琵琶法師の安一座頭

琵琶法師の安一座頭が来た。平家語りや雑芸などを演じてくれた。八日、雨が降った。風呂に入った。御香宮祭祀の風流笠が大がかりのようだ。御所の門が狭いので、今回の風流笠が門の内に入れない。そのため、芝俊阿に間借りしている田向三位の屋敷が風流笠巡行の

途中に当たっているの、「見物に行きたいのだが」と三位に打診した。そうしたら、「ご見物に何の問題もありません、見物席を用意いたします」との返事だった。

今夜、いつものように菊の花に菊綿（※）をかぶせた。

※菊綿（きくわた）：菊の被綿（きせわた）のこと。重陽の節供前夜、菊の花に綿をかぶせてその露や香りを移し取り、翌朝、その綿で身体を拭うと長寿を保つという。

#### 御香宮の祭礼パレード

九日、朝の間、雨が降り、昼には晴れた。重陽の節供をいつものようにお祝いした。田向三位や世尊寺行豊らもお祝いに参列した。お祝いを終えてから、田向家に設営した見物席へ移った。宮家の女性たち、対御方・近衛局・我の妻である今参局らが一緒だった。惣得庵の尼たちや宮家の男女大勢も、見物席に入った。見物席は、櫓（やぐら）の形に組み上げられていた。

まず一献の酒宴をした。しばらくして、御香宮祭礼のパレードがやって来た。まず最初に風流笠と囃子物が来た。次にお神輿。そして神主や巫女が馬に乗ってきた。

#### 祭礼の当番は小川有善

その後にお祭りの当番である小川新左衛門有善が薄色の絹の狩衣を着て馬に乗ってやって来た。有善には、いつものように召使いの男兒四人と従者が練り歩いて付き従っている。

#### 美しい粧いの警備兵たち

そして数十人の警備兵。警備兵はいろいろな鎧を着ており、とても美しい。彼ら警備兵は小川禅啓の宿願により、このパレードに組

み込まれたそうだ。

さらにまた数十人の警備兵。この警備兵たちは皆、美しい鎧や腹巻を着けている。この中には、小松内大臣平重盛の鎧が二つあるそうだ。赤糸で鎧の小札を結びつけており、前立てなどの金物は銀ということで、特に美しい。この警備兵たちは、土倉である宝泉房の立願により、このパレードに組み込まれたものである。次にまた風流笠と囃子物などが来た。

今年の祭礼の趣向はとても立派で驚いた。神輿の巡行が無事終わって、めでたい限りである。神主三木善理の子息である元服したばかりの若者も、パレードのお供をした。新しく任命した神主である三木善国も同じようにお供していた。

祭礼のパレードが去った後も、一献の酒宴が何度も重なり、最後は無礼講の酒盛りになった。田向三位や世尊寺行豊たちが雅楽を演奏してくれた。とても酔っ払って、宮家へ帰った。

#### 琵琶・和歌の百日稽古

今日から百日間、琵琶や和歌を練習することにした。和歌を記した短冊を今出川公富中納言へ送っている。今出川家では毎年、家の歌会を開いて、和歌を詠んでいる。それで私も、和歌を詠んで同家へ送っているのである。

十日、晴。獅子舞が来た。いつものように褒美を与えた。今夜は、山田宮で猿楽がある。

聞くとところによると、室町殿が石清水八幡宮へお参りしたそうだ。今日から七日間、お籠もりするらしい。

#### 法安寺猿楽

十一日、晴。法安寺と権現で、猿楽があつた。法安寺からご見物にいらつしやいませんかと誘いがあつたので、お忍びで見物席に入った。以前も度々、故御所様のご見物なさつたという。それで私も見物することにした。庭田重有朝臣・田向長資朝臣・世尊寺行豊・周郷・稚児たちもお供してきた。

猿楽が三番あつた。猿楽の役者に褒美として太刀を与えた。法安寺住職の良禅上人が見物席に来て、酒宴一献を用意なさつてくれた。

#### 権現猿楽

法安寺の猿楽が終わつて、また権現の猿楽を見物した。見物席はあらかじめ小川禅啓に命じて用意させておいた。今度は田向三位・寿蔵主・珠侍者が一緒に見物した。

猿楽は四番行われた。田向三位が猿楽の役者に褒美として太刀を与えた。一献の酒宴を少しした。小川禅啓が用意してくれた。深夜になつて帰つた。

さて三木善理の事について、鹿苑院主が室町殿へお伺いを立てたところ、「神事については三木善理にやらせなさい。三木善理以外の三木一族の事については、幕府として介入するつもりはない」との仰せだったという。いい知らせであつた。

#### 播磨国国衙領

六条庁官の島田益直が来た。播磨国の国衙領(※)の領地調査について、益直に聞いておきたいことがあつたので、呼びつけたのである。

※国衙領(こくがりよう)：各国の国府の所領。公領ともいう。室町時代の国衙領は、既に国府が衰退しているので、荘園と同じような

私領になつている。播磨国(兵庫県)の国衙領は、伏見宮家の領地。猪口茸(いぐちだけ)

十三日、晴。山遊びに出かけた。松原あたりで猪口茸を採つた。庭田重有・田向長資朝臣らもお供した。

今夜は名月を観賞した。連歌を懐紙一折り分、詠んだ。

十四日、小雨が降つた。播磨国国衙領の領地調査について事務担当の勧修寺経興に連絡するため、庭田重有朝臣が使者として向かつた。

#### 田向長資の笙

豊原郷秋が来た。一越調の曲を七曲演奏した。田向長資朝臣は、この音楽会に参加しなかつた。長資は、もう絶対笙は吹かないと言いつ張っている。郷秋がいろいろとなだめたが、一向に聞き入れない。これまで練習した笙をやめるなんて、もつたないことだ。

十五日、雨が降つた。室町殿が石清水八幡宮にお籠もりになつてい

今日、石清水八幡宮では舞の秘曲の奉納があつたそう

#### 信濃国五個荘

庭田重有朝臣が帰つてきた。播磨国国衙領の領地調査をすることになり、勧修寺経興が合意したそう

だ。まずはめでたい。

さて信濃国五個荘は、父・大通院の時代に上皇様の了承をいた

いて、三年間支配なさつていた。しかし昨年、父が亡くなると、山科教興参議が「上皇様から了承をいただいた」と言つて、無理やり五個荘を自分の領地にしてしまった。

この事を上皇様へ訴えようとしたが、あれやこれや、上皇様のご機嫌のよいタイミングを得ることができずに、時が経つてしまった。昨夜、庭田重有朝臣が使者として京都へ向かつた折に、冷泉永基を



通して上皇様へこの事についてお伺いしたところ、何もご存じないとのことだった。山科参議に五個荘支配の了承を与えたことなど一度もないと、はつきりと仰った。それで、重ねて伏見宮家へ五個荘支配の了承書を与えようと仰ったという。まずは安心した。山科参議が嘘を言ったのだろうか。

十六日、雨が降った。室町殿は、まだ石清水八幡宮に滞在しているようだ。

播磨国国衙領の領地調査の命令書を事務担当の勤修寺経興宛てに書き与えた。この命令書は庭田重有朝臣が執筆した。年番の文書執筆担当者が決まっていないので、まずは重有に書かせたのである。

命令書にはあわせて、今出川公行左大臣や綾小路信俊前参議らとも相談して実行するようにと、書き添えた。

#### 小芹河小田

さて三木一族の没収地のうち小芹河小田について、高倉永藤朝臣の手の者が名主たちの土地経営を妨害しているらしい。それで小川禅啓に酒宴費用五貫文を持たせて、高倉の屋敷に行かせた。高倉の屋敷でいろいろと事情を話した結果、「当方の妨害をやめさせます」と高倉が返事したそうだ。まずは問題がかたづいて、めでたい。

#### 伏見宮家司らの伊勢参宮

十七日、晴。来たる二十二日に宮家の男たちが伊勢神宮にお参りするという。それで旅立ち祝いの酒を与えた。田向三位・庭田重有・田向長資ら朝臣・寿藏主・冷泉正永・女官の賀々・局女の別当・村人の生島明盛・小川禅啓・広時・下野良村・三木善国ら大勢がお参りするらしい。

十八日、晴。二十四日の地藏盆の日程を繰り上げて、今日、地藏講を行った。いつものように善基房がお勤めをしてくれた。地藏講の用意をする当番は、周乾藏主ら五人である。

#### 伊勢参宮のメンバー、精進屋へ移る

伊勢神宮にお参りする人々は、この二十日から身を浄める建物に籠もる。私は服喪中で穢れているので、参宮のために身を浄めなければならぬ彼らが、伏見宮家に勤務しているわけにはいかないのだ。ということで、参宮するメンバーは宮家から出ていった。

#### 足利義持の伊勢参宮

聞くところによると、室町殿は今日、伊勢神宮へお参りしたそうだ。付き従っている公卿は木造俊泰大納言・裏辻実秀中納言・藤原参議、殿上人は日野義資朝臣・高倉永藤朝臣・飛鳥井雅清朝臣らだそうだ。

室町殿は最近、いろいろな神社にお籠もりになっている。特別なご立願があるらしい。何を祈願なさっているのだろうか、世の人々はいぶかしく思っているようだ。そのようなうわさを聞いた。

二十日、晴。冷泉正永が来た。門内には入らず、真っ直ぐ身を浄める建物に入ったそうだ。その建物は、三木善国の家らしい。

二十二日、晴。朝早く、伊勢神宮へお参りする面々が旅立ったようだ。

私の心からの願いを叶えるため、参宮の面々に私の代参としてお参りさせて、伊勢神宮に願をかけた。

#### 伏見御所旧跡で榎の実拾い

伏見御所旧跡に行った。私の娘・対御方・妻の今参・塔頭御寮・玄経らも連れて行った。落ちていた榎の実を拾った。惣得庵の理勝

ら三人と会った。不動堂で惣得庵理勝が一献の酒宴を開いてくださった。思いがけない趣向であった。

綾小路信俊前参議が来た。ちょうどいいタイミングで、うれしかった。これは数日前に伏見に来るよう呼んでおいたのだ。伊勢参宮で宮家に人がいないので、その間、仕えさせるためだ。すぐに音楽会をやるとういうことになった。その後酒盛りになって、とても楽しかった。夕方に帰っていった。

#### 鹿苑院主の大光明寺滞在

さて鹿苑院主が大光明寺に來られて、今夜、お泊まりになるそうだ。伏見までいらつしやるのは珍しいことなので、せっかくの機会だからお会いしたいと思った。それで蔵光庵主と相談したら、「お会いなさるのはよろしいと思います」との意見だった。

それですぐに鹿苑院主へ使者を送ったら、「こちらからお願ひしようと思つていた矢先でしたので、ご使者の派遣うれしく存じます。お会いしたいのはやまやまなのですが、今月にお会いするのは何となく差し控えたいので、今後改めてお会いしたいと思います」とのお返事だった。

それでまた使者を送つて、「今月のご来臨はまことに意外なことでしたが(※)、ちょうど伏見にいらつしやつたのを見過ごすわけには参りません。少しの時間でいいので、お会いしたいです」と伝えた。それでもなお、差し障りがあるとの返事だった。

#### 鹿苑院主、面会拒否の理由

たぶん室町殿が京都を留守にしている間、内密に伏見へ来たのであろう。私と会えば、伏見へ来たことが室町殿に知られてしまうの

を恐れて、二の足を踏んでいるのだろう。

この上は強いて会うことを強要するべきではなからう。それで、今度は綾小路前参議を使者として送つて、ご迷惑をかけたことをお詫びした。それにしても今回、お会いできなかったのは残念だ。

※「今月のご来臨はまことに意外なことでしたが」：原文では「当月誠に意を懸くといえども」とあるが、「意を懸く」を「意を欠く」と解した。

二十三日、晴。鹿苑院主は朝早く京都へお帰りになったそうだ。室町殿も伊勢神宮から京都へお戻りになるようだ。綾小路信俊前参議が来ているので、音楽会をした。盤渉調の曲九つと朗詠などをした。

惣得庵理勝らを音楽会にお招きした。昨日の返礼である。音楽を特に興味深くお聞きになった。夜になって理勝はお帰りになった。一献の酒宴を綾小路前参議が用意した。神妙なことである。

二十四日、晴。朝早く今出川家の者たちが、松の木を取りに来た。以前に約束してあつたことである。私の庭の松一本と小川禅啓の庭の松二本を与えた。

#### 円鑑和尚献上の庭石

また海から取つてきた庭石一つも与えた。円鑑和尚が父・大通院に献上した石である。とても美しい名石である。今出川公行左大臣が綾小路信俊前参議を通して欲しいと言つてきた石である。遠慮ない物ねだりであるが、今出川家に預けて置くことにした。

音楽会をした。一越調の曲十と朗詠一首、次に舞のある万歳楽・長保楽などを演じた。

#### 鳥羽上皇の笏拍子(しゃくびょうし)

さて、鳥羽上皇の笏拍子は、父・大通院の時に綾小路前参議に預けておいたものである。それを今日、綾小路が返してきた。「貞成様が音楽を嗜まれるので、やはり伏見宮家で大切にしておくべき品であると思い、お返ししました」とのことである。とてもうれしかった。

二十五日、朝早く音楽会をした。右楽の曲七つ。次に更闌夜静（※）の朗詠を練習した。この年になつての学習は年寄の冷や水だが、練習に励もうと思う。夜にまた舞のある曲、賀殿・地久・太平楽・拍榊と朗詠などをした。

#### 綾小路信俊、歌謡に関する文書などを見せる

朗詠や宴曲などの歌謡に関する書き物や後深草上皇・伏見上皇・崇光天皇ら直筆の書などを綾小路信俊前参議が持つて来て、見せてくれた。雅楽の道にとつて、貴重な書物である。

※更闌夜静：『和漢朗詠集』恋七九。

二十六日、山井景清・豊原郷秋が来た。音楽会をした。平調の慶雲楽・三台急・甘州・春楊柳・五常楽急・朗詠の徳是（※）・勇勝急・林歌をした。次に舞のある万歳楽・退走徳・太平楽・拍榊・陵王・落蹲を演奏した。

笛は綾小路前参議と景清、笙は郷秋が吹いた。右楽の時、大鼓を郷秋が打った。平調の楽は問題なく、すばらしかった。舞のある陵王・落蹲で、私は琵琶を少し弾き間違えた。とてもよろしくない事だ。音楽会が終わって、酒を振る舞った後、皆、退出していった。夜に一人でまた古鳥蘇・皇仁破急・敷手・納曾利などを練習した。芝殿や禅光らが一献のお酒を少し持つて来たので、味わった。

※徳是：「徳是北辰」（『新撰朗詠集』帝王六一五）。

二十七日、雨が降った。双調の曲九つと催馬楽の安明尊・此殿・席田・美作、律の伊勢海・更衣をした。拍子は綾小路信俊前参議、私は合唱をした。それ以外に舞い立ちの曲である三台・皇仁などを、朝も夕も練習した。

二十八日、晴。朝早く音楽の練習をした。黄鐘調の曲八つと三秋而宮漏正長（※）という朗詠を稽古した。催馬楽の養山・田中井戸・難波海なども練習した。

※三秋而宮漏正長：『和漢朗詠集』落葉三〇七。

#### 真乘院御比丘尼、景愛寺住職に就任

二十九日、晴。太食調の曲十と願以今生世俗文字業（※）という朗詠を練習した。夕方にまた盤渉調の曲九つを練習した。

さて故崇光法皇の娘である真乘院御比丘尼を景愛寺の住職にお招きするそうだ。室町殿のお計らいだという。御比丘尼は再三お断りなさったそうだが、それでも強く要請されて、敵命により景愛寺への移籍が決定したようだ。

それで、真乘院御比丘尼から移籍にかかる経費の助成を頼まれた。「なんとかお役に立ちたいのはやまやまですが、こちらもやりくりが大変なので難しいです」とお断り申し上げた。「ただし、当座にお入り用の分については、なんとか工面します」と申し添えておいた。

#### 虚空蔵菩薩の絵

綾小路信俊前参議に兄が守り本尊になさつていた虚空蔵菩薩の絵一幅を与えた。綾小路が欲しいと言つてきたので、譲つたのである。

※願以今生世俗文字業：『和漢朗詠集』仏事五八八。

### 宇治での坂迎え

三十日、晴。伊勢神宮にお参りしてきた者たちが戻ってくるという。

村人たちが坂迎え（※）として、宇治まで行ったそう。綾小路信俊前参議も同行したらしい。

勝阿が来た。「宮家に人がいないので来るように」と兼ねて命じていたが、「忙しくて、今になってしまいました」ということだった。酒を一献分持つて来て、またすぐに帰ってしまった。

坂迎えに行ったのは、綾小路前参議・田向三位の子息である阿賀丸・村の有力者たちだそう。宇治で酒宴を開いたらしい。

また木幡でも、村人たちが酒宴を用意していたという。夕方になって、皆が戻ってきた。無事にお参りしてきましたと報告があった。めでたいことだ。庭田重有朝臣や女官たちが、それぞれお土産を献上してきた。

### 不浄負け

さて綾小路前参議は宇治からの帰り道、ひどく体調を崩したそう。それで宮家へ戻る事ができずに、内本善祐の家に泊まったそうだ。前参議はまったく気抜けした様子だと報告があったので、びっくりした。

重有朝臣を病氣見舞に派遣して、前参議に蘇香円などを与えた。ひどく酔ったせいであろうか。もしかしたら不浄負け（※）かもしれない。さまざまな治療をして、少し回復したという。巫女にお祓いをさせた後に、人心地がついたようだ。不浄負けだったのは、確実のようだ。綾小路の体調が戻ってきたのは、喜ばしい。

※坂迎え（さかむかえ）：遠い旅から戻る者を村境などで出迎えて、酒宴をすること。

※不浄負け（ふじようまけ）：穢れた身体で神事及びその関連事業に携わったことによる体調不良などの症状をいうか。

十月一日、時雨が降った。「初冬の朔日だ。たいへん幸せで、おめでたい」と予祝した。伊勢神宮にお参りした面々がお土産をいろいろと献上してきた。綾小路前参議の体調が戻ったそう。とてもうれしい。小川禅啓が軽く一献の酒宴を用意してくれた。夜に一越調の曲を五つ、練習した。

二日、晴。高麗楽の曲を十、練習してから、風呂に入った。夜に一献の酒宴があった。伊勢参宮の面々が、はなむけのお礼として開いてくれたものである。

### 播磨国国衙領別納

さて播磨国の国衙領別納の地に関する領地調査の結果に基づいて、その土地を宮家の男女にご恩地として分け与えることにした。その命令書を庭田重有朝臣に書かせた。庭田重有は国衙領に対する年番の領地支配担当者ではないが、領地調査の命令書を重有朝臣一人に書かせた次第である。

### 坂迎えの返礼

三日、晴。坂迎えの返礼として、今日、行藏庵で会合があった。綾小路前参議以下、村の有力者や一般の村人たちが百人ほど集まったそう。うだ。

殿上人と村人が混じり合って同座するのはとても無礼なことだ。後日、綾小路前参議がそのことを批判していた。最近のやり方だと

はいつても、公卿と村人が一同に会して酒宴をするのは、先例無視も甚だしい。「いづれにせよ、一緒に行ったことを後悔しています」と綾小路前参議が語っていた。

#### 早歌「神祇」・「曉別」

夜に音楽会をした。平調の曲十と朗詠、舞が立つ曲の甘州・林歌・抜頭・落蹲を練習した。その次に催馬楽、律の青柳・庭生、朗詠や神祇・曉別という早歌などを練習した。綾小路前参議がちよつとした酒宴を開いてくれた。

#### 伊勢名物

四日、晴。朝早く双調の曲八つを練習した。雅楽の練習が終わって、綾小路前参議が京都へ帰った。彼が数日間に渡って滞在してくれて、とてもうれしかった。お土産にもらった伊勢名物なども少し、綾小路前参議に分け与えた。

#### 一山一寧の書跡

五日、晴。蔵光庵の紅葉が盛りなので、見に行った。庭田重有朝臣たちも連れて行った。蔵光庵主としばらくの間、話をした。そして一山一寧の書跡二つを返した。これは大通院の時に召上げたものだが、寺の物なので返した次第である。その後、指月庵へ行き、しばらく経ってから帰った。外出先では特に面白い遊びもなく、冷たい風が顔に当たり、枯れ葉が髪に落ちかかっただけだった。寿蔵主が伊勢参宮のお土産を特別に送ってくれた。思いがけないことで、うれしかった。

今夜は亥子餅であった。田向三位以下と一緒に亥子餅を食べた。六日、晴。田向三位の妻である芝殿が来た。近々、伊勢神宮へお参り

するという。少し酒を飲ませた。

聞くところによると、今日、北野天満宮で一万部の御経会が始まったそうだ。

#### 貞成の法名

八日、晴。夜に大光明寺長老が来た。夜中に何事かと不審に思った。「急ぎお目にかかりたい」というので対面したら、「お弟子となる伏見宮様の法名を、鹿苑院主が今日、執筆されました。それを急いで持って参りました」とのことだった。この春からずっと希望を出していたのに、今まで目立った反応がなかった。それで心配していたところ、ようやく法名が届いて、とてもうれしい。

最近、鹿苑院主の権威が禅僧の中で抜群に高くなっているので、同院主の弟子となることを特に希望していた。これこそ、前世からの因縁であり、現世における名譽である。

長老が夜中にわざわざ来て下さったことに対して、「恐れ入りです。うれしく存じました」と挨拶しておいた。それですぐにお帰りになった。

九日、雨が降った。大通院の一周忌がだんだんと近づいている。それで法華經一部を、今日から私一人で書き写すことにした。亡くなった父に対する思いを表すためである。

十日、晴。鹿苑院への使者として、田向三位が京都に出かけた。法名のお礼として、馬一匹を差し上げた。ただし馬の代として錢五貫文を送ったのである。良い馬が入手しづらいので、些少ではあるが、香典代として錢を送った。また私のお礼状も渡した。

#### 源氏物語絵詞と八雲抄



正親町三条公雅中納言兼大宰権帥が伏見上皇直筆の書が欲しいと言ってきた。それで直筆の詩歌懷紙二枚と仮名の『源氏物語絵詞』の書写本一卷を与えた。また『八雲抄』をお借りしたいということで、私が書写した六帖本を送った。

#### 顕注密勘

公雅は、故三条実継内大臣入道が伏見宮家へお貸しした『顕注密勘』一帖をお返し下さいとも言ってきた。そのことは知らなかったが、奥書などを調べたらその通りだったので、返した。

芝殿ら伊勢参宮の人達が今朝、出発したそうだ。

十一日、晴。田向三位が帰ってきた。鹿苑院主は留守だったそうだ。

それで、祐藏主に事情を説明して、香典代などを預けてきたという。十三日、晴。鹿苑院主が祐藏主を使い寄こして、お返事があった。

「良い馬を下さり、恐れ多く存じます」と丁寧な返事であった。私の書状に鹿苑院主が初めて下さった返書である。

#### 琵琶「虎」

大工の源内次郎に「虎」という銘のある琵琶を修理させることにした。以前、今出川家にこの琵琶を修理させたが、今度もまた源内次郎へ修理に出すこととなった。大事にしている楽器を何度も修理にだすのは、珍しいことだ。

十四日、晴。亡くなった兄・新御所様の部屋と持仏堂との間に障子を立てて、部屋を分けるための工事を源内次郎にやらせた。

#### 喪明けの日時を占う

さて私の喪が明ける日をいつにしたらよいか、綾小路前参議を通して、陰陽師の賀茂在弘に尋ねた。そうしたら、「来月中がよろし

いでしょう」とのことだった。

「十二月ではだめか」と再度尋ねたら、「喪明けを繰り上げる先例はありますが、一ヶ月延期したという先例はございませんので、十二月ではよろしくありません」との返事だった。「十一月のうち、どの日が良いか、改めて占ってみましょう」ということだった。

さて、この二十九日に称光天皇陛下が笙を吹き始めるとのことだった。先生は、豊原行秋だそうだ。また室町殿の若君は来月、成人式を行うとのことだ。

#### 法安寺田地のいきさつ

十六日、晴。入江殿今御所が法安寺の田地を受け取ったことを伝えてきた。これは故真修院殿から譲与されたものである。この事についてはいきさつがある。去る応永三年（一三九六）三月に崇光法皇が五辻教仲に法安寺の田地一部をお与えになった。それなのにまた、三条局（のちの真修院）に法安寺の田地すべてをお与えになったのである。矛盾したご命令ではなからうか。ただし、どちらが前でどちらが後のご命令なのかは、分からない。後に出されたご命令を用いるべきなので、なんとか崇光法皇の命令書を拝見したいと、こちらから真修院殿へ申し出たのである。

法安寺田六町のうち二町は、真修院殿がご恩地として管理していた。これは現在、真乘院御比丘尼御所が管理している領地である。また三町は法安寺や勒王院などが管理している。そして残りの一町を伏見宮家が管理しているのである。

宮家が管理するこの一町は、六条殿御影供の費用を捻出するために宛行われているものである。崇光法皇の命令書には、この一町も



すべて真修院殿が一生の間だけ管理しなさいという内容が書かれてある。

それなのに真修院殿は、生前、「この一町を入江殿今御所に譲りたい」と言い出したのだ。長年、一生の間だけという約束でやってきたのに、今頃になってこのように言い出されるのは、はた迷惑もいところだ。

「それはできません」と再三お断りしたのだが、結局、押し切られて、この一町を現地で運営している行蔵庵へ「新しい管理者は入江殿今御所だ」と真修院殿が勝手に連絡なされたという。行蔵庵は、この一町を含め法安寺の田二町を前々から現地で運営している。それで、こうした連絡を真修院殿が行蔵庵に出したのである。既に真修院殿には何度もうるさく騒がれたので、結局、こういう困った結果になってしまった。

十七日、晴。真乗寺殿がこの二十五日に景愛寺へお入りになるそうだ。ご助成ができないので、ぜめてものこととお茶五十袋をお贈りした。それにお茶は、ご希望の品でもあったのだ。

### 武蔵堀池

さて上皇御所の雑役人である明盛が不思議なことを企てているようだ。室町女院領の武蔵堀池は、明盛の亡くなった父親である唯玄法橋がご恩地として、一時、管理していた領地であった。その由緒を理由にして、明盛は武蔵堀池を領地にしたいと後小松上皇様に申請したという。こちらには何も連絡がなかったのだから知らないでいたが、武蔵堀池の現地に明盛に関するお触れがでていると勝阿が知らせてきた。私をご恩地として武蔵堀池を勝阿に管理させていたのである。

ある。

不思議に思つて明盛に尋ねたところ、何の返答もよこさない。内々に伝え聞いたところによると、明盛は命令書の発給と伏見宮家への口添えを上皇様へ申請したらしい。何であれ、希望することは自由である。しかし、この土地は花園天皇以来、永円寺に寄付されているものである。その現地管理者を勝阿が務めており、武蔵堀池から出る人夫役を伏見宮家へ差し向けてもいるのだ。それに武蔵堀池は小さな領地に過ぎない。

なんであれ、伏見宮家へ連絡せず、直接、上皇様へ申し上げるとは、おかしな話である。室町女院領は永遠に伏見宮家が管理するようにならねばならぬ。花園天皇以来堅く決められているのである。さらに明盛が室町將軍へも訴えるようなら、不義の至りである。この事があつてから、明盛は伏見宮家へ顔を出さなくなった。よくないことである。

今夜は亥子なので、亥子餅を食べた。

十九日、晴。伊勢神宮にお参りしてきた面々が無事、戻ってくるようだ。田向三位・庭田重有朝臣・田向長資朝臣・世尊寺行豊らが伏見荘の権現まで坂迎えに行つたようだ。田向三位の妻・芝殿らが戻ってくるので、夫と子供が出迎えるというわけだ。これで、家族仲むつまじく、一家が繁栄するものといえよう。

二十日、晴。大工を呼んで、持仏堂の内装を作り直させた。

昨日の坂迎えのお礼として、田向家で会合があつたようだ。

### 良明房、法安寺住職代理に就任

二十一日、晴。田向三位が入江殿へ行った。法安寺の田地のことで、いろいろと打ち合わせをさせた。良明房が来た。法安寺の住職に就

任する件で、内々にいろいろな事を打ち合わせた。それで話がまとも、住職代理を命じる女房奉書(※)を書き与えた。

※女房奉書(ようぼうほうしよ)：天皇や上皇など主人の上意を受けて、女房が散らし書きで書いた書状。主人自身が出すこともある。二十二日、晴。伏見御所旧跡の石を今出川公行左大臣が欲しがっている。父・大通院の時代に石を与える約束をしたそう。それで、今日、大きな石五つを送ることにした。御所旧跡の石は退蔵庵がほとんど引き取ってしまった。その残りの石少々を今出川家に送るのである。

さて上皇御所に仕えている別当局は東坊城秀長参議の娘である。その別当局が今出川家へ手紙をよこしたという。その手紙によると、明盛が申請している武蔵堀池について、上皇様からお口添えがありますという。しかし申請が遅れたため、今年の領地支配は既に大半が済んでいる状況なので、内々の事として武蔵堀池を明盛に与えてはどうだろうか、上皇様が仰っているとのことだ。

「この件は無理な事情があり、ずっと以前に話は済んでいます。ですから上皇様のお口添え通りにするのは困難です。このように別当局に返事を伝えて下さい」と今出川左大臣に返事を出した。

二十三日、晴。朝早く今出川家から荷車で大石を引き取りに来た。まさに石を五つ与えた。かれこれ、与えた石は十個以上になる。

御所侍の親子が大石運びの現場監督に来ていた。以前から親しくしているので、御前に呼び寄せて久しぶりに対面した。子供は元服したばかりで、立派な大人になっていた。少し酒を飲ませた。

### 崇光法皇直筆の命令書

田向三位が帰ってきた。入江殿へ行き、今御所と対面してきた。法安寺の田地のことで、詳しい話をしてきたという。肝心の崇光法皇の命令書を拝見させてもらった。応永三年(一三九六)六月十三日と自筆で書かれてあった。真修院が法安寺の田地を与えられたのは間違いないことようだ。

恐れ多い事ながら、法皇のお手続きそのものに間違いがあったようだ。同じ応永三年三月日に五辻教仲に法安寺の田地一町分をお与えになっている。それから幾日も経たない、その年の六月に、真修院へ法安寺の田地すべてをお与えになったわけである。

三条局(のちの真修院)を愛するあまり故の、お間違いであろうか。はたまた年老いて記憶力が弱まったせいなのか。いずれにしても、当時の法皇のお考えは明らかではない。しかし、裁判上の慣行として、後に出した命令書の方が有効となる。

かくなる上は、真修院に法安寺の田地が与えられたことに、異議を申し上げるわけにはいかないだろう。そうすると、六条殿御影供の経費を捻出するための領地がなくなることになる。他に経費を支出できる領地もないので、困ったことになった。

### 初雪

二十五日、初雪が霜のようにうつすらと降った。雪景色を楽しむというほどではない。

今日、真乗寺比丘尼御所が景愛寺にお入りになったそう。室町殿がこのようにお取りはからいになったというのは、幸運な方だというべきであろう。

石清水八幡宮で、今日から三日間、法華経が詠まれるという。北

野天満宮の経衆千人がこれに参加するらしい。室町殿の御願によるものだそうだ。

二十六日、晴。豊原郷秋が来た。太食調の曲を十、演奏した。

二十七日、晴。豊原郷秋が来た。盤渉調の曲を九、練習した。

#### 田向経良の屋敷、建設開始

二十八日、晴。田向三位の屋敷の建設が今日始まった。まず仮小屋を一軒建てた。この屋敷地は、宝蔵院が管理していた土地である。それを父・大通院の時代に、田向三位が申請して頂いたものである。御所の南面の土地なので、近所に引越して来てくれて、なんともうれしい限りだ。

材木は、御香宮や権現の神木など切ってきたものである。神様の思し召しはいかがなものであろうか、恐ろしいことのように思うのだが。

さて喪明けの日時だが、陰陽師の賀茂在弘が占って来たところによると、十一月二十二日が吉日だそうだ。日が近いので喪明けの準備が慌ただしくなりそうだ。

寿蔵主を使者にして、入江殿へ法安寺の田地について、詳しいことを連絡させた。

#### 薪順事

二十九日、雨が降った。恒例となっている、順番で薪を燃やす行事を今夜から始めることにした。御湯殿の上の間で、薪を燃やすのである。今夜は、庭田重有朝臣が当番になり、薪を用意した。参加メンバーがくじをひいて、当番を勤める順番を決めた。今日は亥子なので、いつものように亥子餅を食べた。

聞くところによると、称光天皇陛下は、今夜から笙を習い始めたそうだ。そのため、室町殿が朝廷に参上したらしい。お台所で笙の練習初めの儀式が行われた。衣冠を着けた豊原幸秋が庭先からお台所にいらつしやる称光天皇陛下に笙の指導をしたらしい。幸秋へご褒美は下されなかったそうだ。

さて今夜、清水寺の北斗堂が焼けたらしい。このお堂は、白河上皇の勅願寺であった。その後、後白河上皇の時代にも焼けたが、それ以後、今まで何事もなかったのだ。仏の思し召しはいかばかりであらうか。

綾小路信俊前参議を使者にして、景愛寺新任職へ無事ご就任のお祝いを申し上げた。

三十日、晴。寿蔵主が京都から帰ってきた。「法安寺の田地からの租税収益ですが、今年から来年までは、全体のうち三分の一をお送りします。その後は、租税満額をお送りします」と申し上げた。それに対して入江殿は、まだはつきりとご承認はなさらなかったという。

#### 落蹲の面

十一月一日、晴。「すべてのことがとても幸せだ」と予祝した。椎野寺主に預けて置いた落蹲の面を取り戻した。

三日、晴。薪を燃やす会をした。陽明局がいつものように当番として準備をした。

聞くところによると、崇賢門院藤原仲子殿が後小松上皇の御所へいらつしやったそうだ。室町殿も同じく上皇御所へ参上したそうだ。四日、晴。法安寺の住持職について、住職の良禪上人がひどい中風なので、良明房が住職代理を務めてきた。それで良禪上人は自分が生

きている間に良明房へ次の任職の任命書を下してほしいと申し出てきた。それで良明房に法安寺住職任命書を与えるように、事務担当の田向三位に命じた。

#### 良明房、法安寺住職に就任

六日、晴。良明房を法安寺住職に任命する件で、事務取扱役の田向三位が任命書を作成した。それで、良明房がお礼のお酒一献分の錢を持つて来た。私が伏見宮家当主となつてから人を任職に任命するのはこれが初めてなので、良明房とはなんらかの縁があるのだろう。良明房は、「これから貞成様のために特にご祈禱いたします」と申した。神妙なことである。

#### 初雪の雪見酒

七日、朝、初雪が降った。三センチあまり積もつた。この雪景色はとも風情がある。陽明局が一献の酒宴を用意してくれた。初雪の時には、恒例のことである。田向三位・世尊寺行豊・行蔵庵寿蔵主らも一献の酒を持つて来てくれた。方々からたくさん酒が来た。私が伏見宮家当主となつてから初めての雪見酒なので、特にお祝いした。一献が何度も巡つた。音楽なども奏でて、酒宴は無礼講の酒盛りとなつた。とても楽しかった。ひどく酔つてしまった。その後、風呂に入った。

#### 田向家の方違え

さて今夜、田向家一族全員が庭田家に移つたそうだ。新しい屋敷を建設中なので、方違えのため、しばらく庭田家に寄宿するという。芝殿の屋敷も壊したという。

八日、晴。今日から身体を浄めることにした。父・大通院の一周忌の

ために書写したお経を読み始めた。

#### 勾当局母子の伏見滞在

九日、晴。勾当局が宇治の今伊勢社へお参りした帰りに、伏見へ立ち寄るそうだ。まず伏見荘山田に宿をとり、夕方、宮家にいらつしやつた。お土産などを持参してきた。私の代になつて初めていらつしやつたので、とてもうれしい。

いろいろなことを話し合つた。それからすぐに一献の酒宴となつた。芝殿も一緒に来ていた。田向三位・庭田重有・田向長資ら朝臣・世尊寺行豊らも酒宴に参加した。数献重ねてから、音楽を楽しむ無礼講の酒盛りになつた。

勾当局の娘・宮内卿を私の面前に呼び寄せ、酒を飲ませた。今夜は伏見宮家に泊まるそうだ。

十日、晴。朝早く、勾当局らは庭田家(※)へ行つた。田向三位が招待したらしい。勾当局は、今日も伏見に逗留するそうだ。庭田家から戻つてきた勾当局と、心静かに雑談をした。惣得庵主が来た。勾当局とお会いするためである。夜に酒宴をした。私が酒宴を主催したのである。

#### 播磨国国衙領の不作

さて勧修寺経興から書状が来た。「播磨国国衙領の土地調査ですが、同国は大不作なので、当年の調査実施は難しいです」という内容の現地報告を飛脚が伝えてきたそうだ。父の一周忌法要の費用に充てるつもりは租税が今日までこの国衙領から出されていない。どう工面したらよいか、とても困つた。

※「庭田家」：現在、田向一家は全員、方違えのため庭田家に寄宿中

なのである（応永二十四年十一月七日条）。

十一日、雨が降った。勾当局が今日お帰りになった。お帰りになる前に、まず一献の酒宴を開いた。これは寿蔵主が勾当局をねぎらうために開いたそうだ。小川禅啓もまた酒樽を献上してきた。一献が重なって、乱舞するまでに盛り上がった。

#### 別当尼公の老狂乱舞

勾当局の娘である宮内卿も、私の前で踊ってみせてくれた。対御方の局女であった別当尼公も同じように、私の前で踊り狂った。年老いた尼が踊り狂うのは、とても年齢にふさわしくないことだ。一献の酒宴が終わって、勾当局一行がお帰りになった。特に引き出物を二つ、勾当局らに与えた。

さて今日、今出川公行左大臣が、今出川実富大納言と今出川富中納言に万秋楽の秘曲を授けたそうだ。

#### 入江殿今御所の法安寺田相続

十二日、晴。法安寺の田地のことについて、先日、寿蔵主が報告した内容を、入江殿今御所はとりあえず納得なさったそうだ。それで、今年から来年にかけて、租税の半分をお送りすることになった。それ以後は、租税全額を受け取れるよう、私の手紙を送っておいた。

この土地はあくまでも入江殿がお亡くなりになるまでの所領であることを改めて釘を刺しておいた。そうしたら、「私の死後も私の関係者に相続させることができるように改めて、命令書を書き直していただきたい」と、重ねて入江殿から要請があった。

およそ女性に与えるご恩地の管理はその人の一生の間だけだということ、崇光天皇のご遺言にもある。また代々の天皇や宮家のご

遺言も同じ内容だ。だから、「お亡くなりになった後、ご自分の関係者に領地を相続させることはできません」と重ねて申し上げた。そうしたら、その後は何も仰ってこなくなった。

#### 富樫満成の書状

さて、富樫満成が大光明寺長老に書状を出してきたそうだ。三木善理の御香宮神主職再任に対する私の承認書がいまだ出されていないことを歎いている内容だそうだ。

三木善理の御香宮神主職再任は、室町殿のご意向であるので、既に神主職は彼に戻している。このことは、今年九月の祭礼の時に、私がそれを承認しているのだ。だから彼の御香宮神主職再任については、何も問題がない。もしかしたら、三木が富樫にうそを言っているのかもしれないが、いかなものだろうかと長老に返事しておいた。

十三日、晴。周乾蔵主がいらつしやった。父の御仏事について相談した。仏事の間は、伏見宮家に滞在なさるとのことだった。大光明寺での法要は、今日から七日間行われるという。

さて大光明寺長老を天龍寺に登用するという任命書が今日、大光明寺に届いたそうだ。それで近々、長老は大光明寺から離れるとのことだ。長老には父の御仏事運営などで頼みにしていたので、がっかりした。

#### 螭螂一匹代わりの祝儀錢

さて田向三位屋敷の建設で、今日が立柱上棟式だという。お祝いに瘦せ馬一頭の代わりに錢（※）を与えた。恐れ入りますとの返事だった。



午後七時に上棟式があった。お忍びで上棟式を見に行った。宮家の女性たちも一緒に行った。上棟式は通例通りのものだった。馬三匹を牽き回して、上棟式は終わった。

その後、伏見宮家へ田向三位は酒一献分を持って来た。ことに上等なお酒を選んで、献上してきたとのことだ。

仏事のため身を慎んでいたのだが、この酒とともに魚を食べて精進を落としてしまった。

#### 田向家屋敷の上棟式

さて上棟式とはどのようなものか、この度の式次第を記しておく。麻の狩衣を着た大工が敷物の上に座り御幣を持ち、三度礼拝した。次に直垂を着た引頭(※)が棟木の上に登って、御幣を立てた。そして槌を三度打ちつけた。

それから伏見宮家御所の青い御馬を牽いてきた。大工がその馬の縄を取り、軽く拝礼した。その後、田向家(※)の赤みを帯びた白毛の馬を先ほどと同様の作法で牽いてきた。さらにまた同じく赤みを帯びた白毛の馬を世尊寺行豊が同様の作法で牽いてきた。この三頭の馬を牽き廻した。

その後、鉦(※)初め。これは柱一本に墨縄を打ち、その三ヶ所を鉦で打つというものである。

最後に三度礼拝して、行豊が持って来た太刀を大工の引き出物として渡して、上棟式は終わった。

※「痩せ馬一頭の代わりに銭」：原文には「蟪蛄一疋(ただし代物)」とある。蟪蛄にはカマキリのように痩せた馬という意味がある。贈答の馬を謙遜した言い方であろう。または主人でありながらも経済

力に乏しいことをなけば自虐的に表現したものともいえよう。

※引頭(いんどう)：番匠集団のなかで、大工の次に位する者のこと。

※「田向家」：原文では「本所」とある。

※鉦(ちような)：鍬のような形の斧。鉦(かんな)として使う。

#### 栄仁親王の一周忌御仏事

十四日、晴。父の一周忌御仏事が今日から始まった。お経を読む道場の設営をした。客殿と常の御所を隔てている障子を取り払い、柱間八間四方の広さを確保した。南側の四間に御簾を懸け渡した。北側の奥の方四間に屏風を立て、その屏風の中央に本尊の阿弥陀如来と不動明王の画像を懸けた。その前に机を立て、その机の上にお供え物や灯明などを置いた。東側の一間にも御簾を懸けて、参列所とした。

お経を交代で読むメンバーの順番を決めた。メンバーは、私・周乾藏主・洪蔭藏主・対御方・近衛局・塔頭御寮恵芳・玄経・山田香雲庵主・綾小路信俊前参議・田向経良三位・庭田重有朝臣・田向長資朝臣・行藏庵寿藏主・冷泉正永らである。椎野寺主と勝阿は遅れてやってきたので、このメンバーには加わえなかった。また善基も軽率な過ちをしたので、このメンバーには加えなかった。

お経を読むメンバーは担当の日だけ道場に詰めるのかどうか、皆で話し合った。やはり毎日だと大変なので、御仏事が行われている間、担当の日だけ道場に詰めることにした。その当番の詳しい内容については、ここには記さない。

いつものように、朝昼晩三回、声を合わせて法華経を唱えた。周乾藏主・洪蔭藏主が来た。冷泉正永も来た。綾小路信俊前参議は、



十六日に来る予定だそうだ。

### 御仏事の経費

さてこの御仏事の経費に充てる予定の播磨国国衙領の租税を収納するように、事務取扱の勸修寺経興に督促した。勸修寺経興は「了解いたしました」と返事をおきながら、いまだに租税を送ってこない。「播磨国は大不作なので、今年の土地調査を実施するのは難しいです」という現地代官の報告を、勸修寺は伝えてきただけである。綾小路信俊前参議を通して勸修寺と話したが、ともかく租税の収納は困難ですの一点張りだそうだ。まれに見る事態である。

### 懺法講

御仏事の一環として、懺法講（※）を行いたいと思っている。安楽光院院主に懺法講を勤めなさいと命じた。楽人として園基房前参議・四条隆盛朝臣・六位以下の役人である山井景房らに出席するよう、綾小路前参議に連絡させた。綾小路のように公卿の位にある者を仏事の事務担当者にするのはよいものかどうか、迷った。「しかし、せつかくの懺法講ですから、せめて事務担当だけはいたします」と綾小路は申ししてきた。神妙である。事務の総括責任者は、庭田重有朝臣だ。

さて田向長資朝臣は、この六月の上皇御所での舞御覧で、雅楽の演奏を申し出たが、お許しがなかった。それで失望して、笙を吹くのをやめると言いだした。それなので、今回の懺法講でも笙は吹きませんと申ししてきた。残念なので、父の田向経良卿からも笙を吹くように言ってもらった。しかしそれでも、長資朝臣は承諾しなかったそうだ。

※懺法講（せんぼうこう）：法華経を誦誦して罪を悔い改め、来世には極楽浄土に生まれることを願う法会。

十五日、晴。良明房が来た。軽食などを持ってきた。世尊寺行豊・珠侍者も来た。椎野殿からご直筆の法華経一部が送られてきた。

聞くところによると、今日の毎月恒例の上皇御所音楽会に、園基世侍従が初めて参加するそうだ。公の場で初めて琵琶を弾くという。十六日、綾小路信俊前参議が来た。懺法講のお勤めをいたしますと安楽光院長老からの返事が来た。僧七人で参るとのことだった。

懺法講で楽人役を勤める園基房前参議や四条隆盛朝臣からも、参加するとの返事だった。六位以下の楽人である山井景房・豊原家秋・同郷秋・同敦秋・大神景勝も参加すると申ししてきた。それ以外の者たちは差し障りがあつて欠席することだった。

筆筈（ひちりき）を吹く者がいない。安倍季長が欠席だからだ。残念なことだ。

御仏事の経費について、綾小路前参議を通して勸修寺経興と連絡を重ねたが、やはり難しいとの返事だという。今回は播磨国国衙領から租税の収納はできないかもしれない。まれに見ることだ。

### 大光明寺住職の退任

さて大光明寺長老が衣鉢侍者を使者にして言ってきたことには、長老を天龍寺へ移籍させる任命書が既に届いているそうだ。急いで京都へ出てくるように鹿苑院主から催促されたので、今日、大光明寺を出ますとのことだった。

「もつとも御所様とお会いしてお暇のご挨拶をするべきなのですが、急いでいるのでご連絡のみのご挨拶で申し訳ございません」と

のことだった。衣鉢侍者と面会して、私の返事を伝えておいた。十七日、晴。御仏事の経費について、勧修寺経興と何度も協議したが、今日に至るまで送金してこない。まれに見る事態だ。いずれにしても、懺法講は明日行うことに決まっている。

綾小路信俊前参議が来ているので、雅楽の練習をした。盤渉調の曲八つを弾いた。練習が終わってから酒宴となった。綾小路前参議が酒宴を準備してくれた。綾小路前参議以外にも、世尊寺行豊や冷泉正永らも酒宴に参加した。豊原郷秋も来た。それで夜にまた練習をした。宗明楽・蘇合序(十二拍子)・蘇合三帖・蘇合破急・万秋楽破・白柱・輪台・青海波・千秋楽などを弾いた。

田向経良三位は以前からずっと笙を吹くのをやめてしまったので、参加しなかった。田向長資朝臣も風邪だと言って、出てこなかった。所詮、長資は懺法講で笙を吹くつもりはないのであろう。残念なことだ。

郷秋にいろいろと命じた。他にも六位以下の楽人たちは来るだろうという。それで休憩所に酒や肴を用意しておくように、総括事務責任者の庭田重有朝臣に命じた。その酒肴代として銭二貫文を渡した。

さて、軒端にある古木の紅梅が夏ごろから枯れ始めた。枯れ木は見苦しいので、今日、この紅梅を切らせた。昔からの名木だったので、名残惜しいことだった。

#### 田向長資への諷諫

十八日、晴。朝早く田向長資朝臣の笙演奏のことについて、父の田向経良三位に手紙をだした。このままでは良くないと教訓を与える一

方で、さらに場合によっては私から長資を家司から解任するかもしれないなどと書き付けた。それで田向三位は父親として一生懸命、長資を諷めたようだ。それで長資は笙を吹くことを了承したという。まずは神妙なことだ。

椎野寺主がいらつしゃって、酒樽やお茶菓子などいろいろな物を頂いた。惣得庵主もお茶菓子などを持って来てくれた。西大路隆富が来て、御仏事料として銭二貫文を献上してくれた。今出川左大臣も、同じく御仏事料として銭二貫文を送ってくれた。勾当局は、父・大通院が残した書状の裏に書写した法華経寿量品を、銭二貫文のお布施と一緒に送ってくれた。人々の志をうれしく思った。

麻の狩衣を着た園基房前参議と四条隆盛朝臣が来た。彼らには、殿上の休憩所で待機してもらうことにした。安楽光院長老とお供の僧たちが来た。彼らには行藏庵を休憩所として、そこで待機してもらうことにした。

#### 御仏事には麻の狩衣を着るべし

各々麻の狩衣を着た六位以下の楽人たちも来た。しかし、豊原郷秋と同敦秋の二人は略装だった。事務責任者から服装について事前にきちんと連絡をいれてなかったために、狩衣の用意をしていなかったという。形式的なこととはいえ、嚴重に行う御仏事である。略装はよろしくないだろう。六位以下の楽人たちは近所の小さな寺庵を休憩所として、そこで待機してもらうことにした。

今回演奏する雅楽の曲の一覧を私が書いて、綾小路信俊前参議に渡した。綾小路は曲をリードする笛の役(※)なので、曲の一覧を渡したのである。安楽光院長老と会った。次に園前参議ともあった。

園に会うのは今回が初めてである。音楽についてはすべて、綾小路前参議に任せた。

### 懺法講道場の内装

まず道場の内装配置であるが、柱間八面のところ、南の四面に緑の簾を懸け渡した。北奥から南側二面に屏風を立てて、本尊阿弥陀如来の画像を懸けた。

本尊の左脇に故大通院のご位牌を立てた。ご位牌の前には大机を一つ置いた。大机の上に敷物を敷き、その上に供物や灯明を供えた。大机の前にも机を置いて、その上に仏具を置いた。この仏具は称名院から借りてきたもので、美しいものである。その机の前に導師が座る壇を置き、その右脇に馨（※）を吊した台を置いた。

本尊の右脇には不動明王の画像を懸けた。その前にも机を置き、机の上に香炉などを置いた。

### 参列者の座席

本尊の左脇西側、奥の二間に緑色の簾を懸け、参列席とした。そこに大文縁の畳を敷き、私の参列席とした。

西の次の間に小文縁の畳を二帖敷いて、椎野寺主・周乾蔵主・洪蔭蔵主・田向三位らの参列席とした。

南の二間西面にも緑色の簾を懸け、参列席とした。ここには、宮家の女性たちや比丘尼たちが参列した。

道場西の二間には高麗縁の畳二帖を南北方向に並べ、殿上人の衆人らの演奏席とした。演奏者の座席や僧たちの座席の設置の仕方は本来のやり方とは異なる。しかし座敷が狭いので、このようにせざるをえなかった。

南四間の端の方には高麗縁の畳三帖を東西方向に敷いて、僧たちの座席とした。この僧たちの座席中央が長老の座席である。

殿上人の衆人の演奏席の後方、西面二間の大床には屏風を立て廻して、六位以下の衆人の演奏席とした。六位以下の衆人の演奏席には畳を敷かないのが通例のだが、寒い時期なので、特別に敷いたのである。

座敷が狭いので、だいたい以上のように配置した。

### 懺法講開始

開始時刻の午後七時になって、私が参列席に座って、御簾を降ろさせた。次に麻の狩衣を着た綾小路信俊前参議と園基房前参議・田向長資朝臣・四条隆盛朝臣らが着席した。次いで、六位以下の山井景房（麻の狩衣）・豊原家秋（麻の狩衣）・同郷秋・同敦秋・大神景勝（麻の狩衣）らが着席した。

綾小路前参議が、雅楽の曲目の一覧表を開いて見た。田向長資朝臣が盤渉調の調子を吹いた。管弦がそれに応じた。僧たちが道場に入ってきて着座した。導師が高座に登った。

調子あわせが終わって、宗明衆が演奏された。次に全員が拝礼した。その次に伽陀（※）を唱えられた。そして懺法供養の目的を書いた文が読まれた。次に音楽で、十二拍子の蘇合序が演奏された。次に敬礼の段となった。そして音楽で蘇合三帖が演奏された。

ついで六根の段となった。まず初段と二段である。次に音楽で、蘇合破と同急が演奏された。次に三段・四段となった。

私は御簾をあげさせると、綾小路前参議が御前にやってきた。雅楽の伴奏について、命令をした。笛は綾小路前参議、笙は郷秋で、

琵琶はすべて省略させた。

次に音楽で万秋楽破が演奏された。次に五段。この伴奏は、笛は景房、笙は郷秋にやらせた。そして六段。この伴奏、笛は綾小路前参議、笙は郷秋。さて敦秋の笙の出番を一度は与えておきながらも、結局、郷秋ばかりがずっと笙を吹くのはいかがなものであろうか。そして四悔。次に音楽で白柱が演奏された。次に十方念仏経の段。この間、僧たちが道場内を歩き回った。

### 残楽

次に音楽で輪台・青海波が演奏された。この演奏の前に綾小路前参議が座を立ち私の御簾の前に来た。そこで青海波は残楽(※)を三回すべきでしょうかと聞いてきた。残楽はすべて省略するよう、あらかじめ決めておいた。

箏の演奏がある時は琵琶が残楽をする。箏の演奏がないときは、ただ琵琶だけで残楽するのは普通、ありえない。崇光天皇や大通院らのように雅楽にご堪能な方々の場合は特別である。未熟な琵琶奏者の場合、琵琶の残楽はやらない方がいいので、やはりやめさせた。

しかし今回の演奏はとてもよろしいので、残楽ではなく、三回演奏を繰り返すのはいいかもしれないとアドバイスをした。笛役である綾小路前参議の判断に任せようと言っておいた。いずれにせよ、残楽ではなく三回繰り返し返すのは、先例にもある。青海波の二回繰り返し返すの時、園前参議の琵琶の弦が切れた。そのため残りの一回あまりは私一人で弾いた。まずは問題のない演奏だったと思う。

次に回向の伽陀が唱えられた。伴奏の笛は綾小路前参議と景房が

代わる代わるに吹いた。笙は郷秋が吹いた。次に音楽で、千秋楽が演奏された。

懺法が終わって、長老と僧たちが座を立った。次に六位以下の衆人たちが座を立った。そして殿上人の衆人たちが座を立った。その後、御簾の中の参列者たちが立ち上がった。

僧たちは、行藏庵に行き、六位以下の衆人たちは近所の小さな寺庵に退いた。

### 懺法講の直会

殿上人の衆人たちのために、殿上で一献の酒宴を設けた。綾小路前参議・園前参議・重有朝臣・長資朝臣・隆盛朝臣・西大路隆富らに参加した。盃が何度も廻り、女官たちが酌をするようになったようだ。

私の御前での酒宴には、椎野寺主・宮家の女性たち・田向経良卿・世尊寺行豊・冷泉正永らが参加した。特に三献をして御仏事が無事終わったことを喜び合った。

### 貞成の演奏

懺法の音楽はとても素晴らしかった。すべてが無事に終わって、喜ばしいことだ。公の席における私の琵琶の演奏が初めてだったので、問題なく上手に弾けたことを皆が褒めてくれた。山井景房は「貞成様のご演奏を初めて聴きましたが、耳をよるこばす音色でした」と言ってくれたそうだ。この場でのお世辞だとは分かっているが、まずは喜ばしいことだ。

ところで、散華の役をする人がいないので、退藏庵稚児の景延にその役を勤めてもらった。僧たちへのお布施は、勧修寺経興が播磨

国衙領の租税からお支払いすることように、命じておいた。しかしお布施の納入は遅れて、さらには額も不十分だったらしい。勧修寺経興のひどい怠慢によるものだ。よくない、よくない。

### 僧と演奏者、演奏曲の一覧

#### 僧の名前

導師は安楽院長老の良友 永円寺住僧の見芳 妙慶 賢心 明慶

故四条隆仲朝臣子息の見紹 宗寿

#### 演奏者

簾中の私 綾小路前参議 園前参議 長資朝臣 隆盛朝臣 景房

鞆鼓の家秋 豊原郷秋 同敦秋 大鼓の大神景勝

#### 演奏した曲 盤渉調

宗明楽 十二拍子の蘇合序 蘇合三帖 蘇合破・急 万秋楽破

白柱 輪台 青海波 千秋楽

※「曲をリードする笛の役」：原文では「面笛」とある。面笛の意味がよく分からないが、このように解した。

※馨（けい）：撞木で打ち鳴らす、青銅製で板状の楽器。

※伽陀（かだ）：経文の中にある韻文体の詩句。

※残楽（のこりがく）：雅楽で、楽器が順々に少なくなっていく、最後は箏と絃楽器だけの変奏曲となる演奏法。

#### 書写法華経などの供養

十九日、晴。午前五時、皆で分担して法華経を写した。私以下、侍臣達や寺庵に分担させて写させたのである。これは、対御方と近衛局が御仏事の一環として始めた事である。

朝早く、綾小路信俊前参議・園基房前参議・田向長資朝臣・四条

隆盛朝臣・西大路隆富らが行蔵庵に行った。これは、僧たちの軽食を行蔵庵で用意しており、そのお相伴として彼ら俗人も招待されたためである。

軽食を終えてから、安楽光院長老が宮家へ来た。いくつかのお経を供養してもらうためである。そのお経とは、以下の通りである。

私自筆書写の法華経一部。椎野寺主自筆の法華経一部。皆で分担して写した法華経一部。同じく時間をかけて写した法華経一部。対御方宛て大通院書状の裏に写した金剛経一卷。近衛局宛て大通院書状の裏に写した法華経普門品一卷。勾当局宛ての大通院書状の裏に写した法華経四要品一卷。同じく勾当局宛ての大通院書状の裏に写した法華経四要品一卷。

法華経などの書写供養は父が死に際に仰ったご希望だったので、今回の供養にあたって改めて供養の趣旨を述べることはしなかった。供養は型どおりに終わった。供養の後、長老と会って、少し話をした。そしてしばらくしてから、長老は帰っていった。

#### 綾小路信俊の名演奏

園前参議・隆盛朝臣が戻ってきたので面会し、その後すぐに京へ戻っていった。山井景房・豊原家秋・同郷秋・同敦秋・大神景勝らとも面会し、彼らもすぐに京へ戻った。

綾小路前参議に殿上でねぎらいの酒を振る舞った。そうしたら綾小路が笛を吹きましょうと言いだした。万歳楽・三台急そして五常楽急の三曲を吹いた。吹き終えてから、彼も京都へ戻っていった。とてもすばらしい音色に聞き惚れた。

さて新任の住職文鼎和尚が今朝、大光明寺に赴任した。彼は万寿



寺の住職であった。夕方、挨拶に来られたので面会した。そしてすぐに寺に戻っていった。

玉櫛禅門が来た。「昨日の懺法講に参列できず、残念です。その分、今日は特に焼香をしに参りました」と言った。

### 椿一検校の平家語り

椿一検校が来た。夜になって道場へ呼び出して、平家物語を語らせた。聴衆が大勢集まった。皆、とても感激していた。

その後、御湯殿の上で、当番で薪を焼く会合をした。私の妻・今参局が当番だった。宮家の男女皆が集まった。御湯殿の上へも椿一検校を連れてきて、また平家物語を二句ほど語らせた。その間、盃が何度も廻ってきた。玉櫛禅門は椿一検校の平家語りにも感心していた。深夜に解散となった。

二十日、晴。大光明寺に御仏事料五貫文を送った。本来なら長老たちをお招きして手ずからお渡しすべきだが、住職着任早々でいろいろと忙しいようなので、送金するだけにした。御所に即成院主、同院善基や法安寺住職良明房らを招いた。軽食が終わって、道場で椿一検校に平家物語を二句語らせた。

### 栄仁親王一周忌法要の終了

その後、一時間ほどいつものようにお経をあげた。お経の後、道場と私の部屋とに分かれて、それぞれ食事をとった。椎野殿が一献の酒宴を少々用意して下さった。予定の仏事がすべて終わったので、大光明寺にお参りして、焼香した。宮家の女性たち三人、綾小路信俊前参議・田向三位・重有朝臣・長資朝臣らがお供した。これで一周忌の御仏事がすべて無事終了した。

特に懺法講は、父のお心になつたものであろう。父の尊霊が解脱を遂げたのは疑いないところであらう。

私自筆書写の法華経は、去る十月九日から寸暇を惜しんで書き写してきたものである。ただしうかつなことに忙しかつたので、すべてを写しきれなかった。とりあえず巻物の表題だけ書いて、供養した。

周乾蔵主が嗟峨で御仏事を行って下さったという。しかし、形だけの御仏事料しか差し上げられなかった。田向三位もこの御仏事料を出してくれた。同じく勧修寺経興も御仏事料二貫文を出してくれた。御仏事料としてはとても少なく、足りたものではなからう。

六条庁官経直が同庁島田益直の代わりに法事見舞に来てくれたそうだ。

### 伏見荘満枝名

さて周乾蔵主が私に話があるという。長橋局が伏見荘満枝名をお与え下さいということ、周乾蔵主を通して申し入れてきた。このお返事は後でしますと言い含めて、周乾蔵主には寺へお帰りいただいた。西大路隆富も帰っていった。

夜に台所で酒盛りがあった。玉櫛禅門・綾小路前参議・田向三位らをはじめたものである。椿一検校が平家語りやいろいろな芸能をやったそうだ。

父が亡くなって時間が経つているとはいえ、まだ一周忌を終えたばかりである。この時期に無礼講の酒盛りをするのは、いかがなものだろうか。不作法の至りではないか。

二十一日、晴。玉櫛禅門が一献の酒宴を用意してくれた。これは、父



の一周忌御仏事が無事終わったことを喜び、また精進落としを兼ねるものだという。思いがけないことで、うれしかった。

一献の酒宴が終わってから、風呂に入り、髪を洗った。明日、喪が明けるので、身体を浄めたのである。夜に台所で、椿一検校に平家物語を語らせた。

#### 喪明けの儀式

二十二日、晴。今日で喪が明けた。喪明けの儀式は、旧例通りではなく、すべて略式で行った。朝早く、田向三位が賀茂在弘の日時占いの報告書や祓え串などを持って来た。本来ならばこれらは陰陽師自身が持つてくるもののだが、略式にするので自分自身で持つてこなくてよいと、前もって命じておいたのである。それで使者が持つて来た。

指定された時刻になり、解いていた本鳥（もとどり）を結び直し、通常の服に着替えることになった。烏帽子は冷泉正永が被せてくれた。午前十一時に萌黄色の小狩衣と通常の大口袴を着た。次に田向長資朝臣が持つて来た手水で口をすすぎ、手を洗った。そして日時占いの報告書を見た。報告書は箱の蓋に載せられており、庭田重有朝臣が持つて来てくれた。

喪明けの日時を占い選びました。

今月二十二日甲戌 時間は午前十一時です。

酉と戌の間（西方向）の御辛方（※）の方角を向いて、

喪明けの儀式をして下さい。

応永二十四年（一四一七）十一月二十二日

曆博士賀茂朝臣在方（※）

見終わってすぐに返した。報告書は御所に保管しておく。

次に廂の間に円座を東西方向に敷いた。本来ならば半帖畳を敷くべきなのだが、略式に円座を用いた。酉と戌の間（西方向）の吉方の方角を向いて、座った。次に庭田重有朝臣が祓え串を持つて来たので、それで全身を撫でた。お祓いが終わってから立ち上がった。すべて略式なので、先例通りの作法ではない。儀式が終わって、長絹の小狩衣の喪服を賀茂在弘に与えた。祓え串なども同じく在弘へ返した。

#### 常御所へ移る

次に常御所に移った。これは大通院のお部屋だったが、昨年冬のより私の部屋にした。今日、常御所へ移住するにあたり、一献の祝宴をした。綾小路信俊前参議や田向経良三位らが特別に一献を献上してきた。数献に及んだので、酒宴にあわせて音楽を演奏した。

楽拍子の万歳楽・三台急・五常楽急・朗詠・太平楽急。太平楽急の演奏に合わせて、玉櫛禅門と冷泉正永らが上手に舞った。面白かった。そして長保楽急、これには田向三位が笙で伴奏した。笛は綾小路前参議、笙は長資朝臣、琵琶は私、大鼓は田向三位だった（※）。酒宴はたいへん面白かった。皆酔ってしまった、夜遅くにお開きとなった。その後、台所で無礼講の酒盛りや音楽会があった。

喪明けの儀式が無事に終わった。よかった、よかった。

※辛方：吉方の誤記であろう。地の文には「吉方」とある。

※「在方」：在方は在弘の誤記であろう。

※「田向三位」：原文では「綾小路三位」とある。

二十三日、雨が降った。御湯殿の上で、当番で薪を焼く会をした。私

の娘が当番だった。一献の酒宴をしながら、連歌を詠んだ。椎野寺主・玉櫛禪門・田向三位・重有朝臣・正永・行光・椿一檢校らが連歌のメンバーであった。椿一は盲目ではあるが、連歌の腕は間違いないらしい。ただ玉櫛禪門が風邪気味なので、懐紙三枚分のところで中断した。椿一檢校が平家語りをしてくれた。

酒宴が終わって、台所でまた平家語りがあった。長資朝臣は朝廷の小番を勤めるため、京都へ出ていそうだ。

二十四日、晴。綾小路信俊前参議が帰っていった。今回はいろいろなことをやってくれた。その努力は神妙なものであった。

椿一檢校も出ていった。彼には琵琶の弦や扇などを与えた。

西大路隆富が一献の酒を持ってきてくれた。これは喪明けのお祝いだそうだ。とても懇切なことで、神妙である。酒宴五献してから、帰っていった。冷泉正永も同じく帰っていった。

夜になって昨日の連歌を再開した。残りを詠んで百韻を完了した。

#### 栄仁親王の守り本尊・文殊菩薩

二十五日、晴。玉櫛禪門がお帰りになった。彼に文殊菩薩の画像一舗を与えた。大通院が大事にしていた守り本尊である。御形見として与えたのである。

#### 琵琶「孔雀」

さて「孔雀」の銘がある琵琶が修理されてきた。今日、初めて弾いてみた。音の響きはとるに足らないものだった。たいして良い楽器ではないようだ。

二十六日、晴。当番で薪を焼く会合をした。対御方が当番の役だった。いつものように酒を飲んだ。

さて侍所所司代・一色の下級役人が来て、三木善理へ屋敷や家財を元のように返却するように申し入れてきた。將軍の上意だという。しかし、上意であることを示す書類はない。ただ下級役人が口頭でそのように言っているだけなので、怪しい。もしかしたら偽りを言っているかもしれないので、「それはできない」と返事しておいた。

#### 中峰明本の阿弥陀如来画像

二十八日、晴。私一人で書写していた法華経を、今日、ようやく全巻写し終えた。すぐに大光明寺の大通院御廟の前に奉納した。

椎野殿が自分のお寺に帰られた。中峰明本和尚が描いた阿弥陀如来の画像一舗を彼に差し上げた。

#### 田向家、新築の屋敷へ引越す

今夜、田向経良三位が新築の屋敷に引越す。まだ半分しか出来上がっていないが、まず移住することだ。引越祝いが終わって、田向三位が一献の酒を持ってきた。彼は既に酔っ払っているのので、飲んでいて面白かった。

#### 室町女院領河内国高柳荘

さて今出川家と言うには、室町女院領のうち河内国高柳荘の支配は有名無実になっている。ところが、ある人が画策して高柳荘の支配を回復することができそうだという。それで、高柳荘の管理を今出川家に任せるといふ内容の命令書をお書き与え下さいとのことだった。庭田重有朝臣に命令書を書かせて、今出川家へ送った。

#### 命令書の日時を応永二十三年十月九日とする

大通院の時代に高柳荘を今出川家に下さる約束だったとのことなので、日時を「応永二十三年（一四一六）十月九日」と書かせた。

今出川家の希望により、このような命令書を書き送ったのである。

### 武蔵堀池

二十九日、晴。綾小路信俊前参議が書状を送ってきた。それによると、生島明盛が支配を望んでいた武蔵堀池について、後小松上皇様から綾小路前参議に対して、伏見宮家へ取り次ぐようにとの仰せがあったそうだ。すでに上皇様の支配承認書が明盛に下されているという。この命令書は万里小路時房参議兼左大弁が執筆したそうだ。その命令書の写しも添えられてきた。

しかし、実際には伏見宮家の領地として勝阿に管理させている関係上、伏見宮家に取り持つてほしいというのが、上皇様の仰せだという。綾小路前参議には「上皇様へのご返事は、後ほど、こちらから出します」ととりあえず返事をおいた。

先だつても上皇様は、別当局を窓口にして今出川家を通して私にこの件を打診してきた。なんとも面倒で、困ったことである。十二月一日、晴。「めでたく喜ばしい。とても幸せだ」と予祝した。良明房が来た。月初めのお祈りを勤めてくれた。その後、聖幢庵のことで話があった。

### 足利義量の元服式

さて室町殿の若君が今日、元服した。冠を授ける役は、時の内大臣である父の足利義持殿、髪を整える役は万里小路時房参議兼左大弁だそうだ。元服式に参列した公卿は、広橋兼宣大納言・院執権の日野有光中納言で、その他、諸役を勤めた殿上人は五人だという。殿上人の参列者名簿はまだ見ていない。

若君のお名前は義量と決まった。これは、東坊城長遠大藏卿が考

えて命名したそうだ。今夜、義量殿には正四位下・右近衛中将の官職が授けられ、禁色などの許可がだされた。

### 足利義満の佳例

この元服の儀式で義量殿は、衣冠束帯姿で感謝の意を示す拝礼をした。その後、服装を烏帽子・黄褐色の直垂に改めた。この時、烏帽子を被せる役をしたのは、高倉永藤朝臣であった。

更にまた服装を折烏帽子と素襖に着替えた。この時、折烏帽子を被せる役をしたのは、武家近習の三淵だった。

服装を三回も着替えるのは珍しいやり方である。内々、日常的に着る服は、折烏帽子と素襖だという。このように元服式で三回も着替えるのは、故北山殿・足利義満殿の時の佳例なのだそうだ。義量殿は、この十三日に朝廷に出仕するという。さぞや厳粛な儀式になることであろう。

二日、晴。武蔵堀池の領地の事について、「勝阿が武蔵堀池の管理人なので、こうした状況を今日、彼に伝えておきます」と、とりあえず綾小路信俊前参議へ返事を出した。

### 庭田重有の風邪

さて庭田重有朝臣は昨夜から風邪だそうだ。宮家に出てこないのは、どうも様子がおかしい。

賀茂在弘が年末年始に関する占いの報告書を送ってきた。ずいぶん手早なことである。

三日、晴。武蔵堀池について今出川家に相談したところ、つまるところ、「武蔵堀池はもともと、長講堂領なわけですから」ということで明盛が申請したので、上皇様の命令書が出されたということらしい。

い。

ところが本当は室町女院領だということを上皇様はご理解なさったので、前に出した命令書を破棄なさって、なんとか伏見宮家へ取り次ぐようにと命令なさったようだ。その後、この件に関して上皇様は何も仰ってはいませんと別当局はいっているそうだ。

明盛が嘘を言って領地をだまし取ろうとしているのは、大変けしからんことである。

五日、晴、夜に雨が降った。若君足利義量殿のご元服のお祝いを室町殿に申し送った。田向三位がその使者として室町殿の御所へ出かけ、常宗を通して、祝詞を申し述べた。

今度の十三日に足利義量殿が朝廷に出仕される儀式は、厳粛に行われるという。一条経嗣関白以下錚々たるメンバーが参加するらしい。今出川家からも公行左大臣と公富中納言の両人が出仕する予定だと広橋兼宣が話してくれた。慌ただしいことだと今出川左大臣がぼやいていらつしやったという。

さて庭田重有朝臣の風邪はいまだ治らないという。今後四〜五日間ぐらいは療養が必要であろうとの連絡がはいった。重有朝臣の病状について、陰陽師に尋ねてみることも言っていた。

#### 田向長資の妻、女子を出産

今夜、田向長資朝臣の妻が女の子を安産したそうだ。

六日、雨が降った。御香宮・山田宮・権現などへお参りした。自筆の般若心経を三社それぞれに奉納した。私が喪に服してから後、初めての参詣である。神々は私の祈りをききとお聞き届け下さるであろう。田向長資朝臣一人をお供に連れて行った。

田向三位が帰ってきて言うことには、室町殿若君のご元服のお祝いに公家や武家が室町殿へ差し上げた進物の馬や太刀をすべて石清水八幡宮に寄付したそうだ。太刀は三百六十振り余り、馬は百頭余りになったそうだ。若君の母である御台所・日野栄子殿も、お祝いの品をすべて残らず三所(※)へ寄付したそうだ。

※「三所」：不明。

#### 庭田重有の重病

七日、雲が降った。寒さも厳しい。いつものように、田向長資朝臣が当番として薪を燃やす会の用意をした。

さて庭田重有朝臣の風邪はさうとう重いようだ。重有は万一のことを考え、子息の慶寿丸への家督相続を承認してほしいと病床で言ったらしい。賀茂在弘に尋ねたところ、流行病の疑いがあるとの返事だった。

#### 伏見宮家と庭田家の通路を塞ぐ

それで今日から流行病の侵入を警戒して、庭田家と宮家との通路を塞いだ。慶寿丸に病気が移らないよう、宮家に泊まらせることとした。年末の慌ただしい時期に、驚くべき事態となった。

#### 豪融僧正の吉夢

明け方の夢に、豪融僧正が出てきた。故御所栄仁親王と新御所治仁王と一緒に座って、一献のお酒を飲みながら連歌会をしていた。

私に最初の句を詠みなさいとのご命令だった。春の暮れ時の心持ちがしたので、次のように詠んだ。

またも来ん 名残と言はじ 春の暮れ

その後、豪融が出ていった。私が最初の句の意味を述べたら、皆が褒め称えて、懐紙にこの句をお書き下さっていると、夢が覚めた。

豪融は今、室町殿のご機嫌を損ねたため、田舎に隠居しているところである。この夢は、もしかしたら豪融が世間に復帰する前触れかもしれない。縁起のいい夢なので、記録しておこう。

豪融は、伏見宮家のことを殊の外心配してくれた者である。隠居するようになり、父の死後は、いまだに宮家に顔を見せていない。そういう状況なので、このような夢を見たのは、不思議なことだ。

九日、雪が時々降った。賀茂在弘の占いでは今日が吉日なので、煤払いをした。その後、いつものようにお祝いをした。

夜に、寿蔵主が当番として薪を燃やす会の用意をした。丁寧に準備してくれた。大教院隆経がたまたま来ていたので、この会合に加えた。

今夜から三日間、新築の田向家で不動供の法会を行うという。

### 庭田重有、快方に向かう

さて庭田重有朝臣は今朝から症状が収まってきた。夕方には意識も戻ってきたと報告があった。とてもめでたいことだ。

十日、晴。今日は今出川家西向殿の祥月命日だ。いつものように、身を淨めてお経をあげた。

十一日、晴。豊原郷秋が来た。音楽会をした。双調の曲八つを演奏した。田向長資朝臣は短い曲（※）で笙を少し吹いた。惣得庵主や明元らが来た。少し酒を飲んだ。

※「短い曲」：原文では「小楽」とある。

十二日、晴。夜に雨が降った。綾小路信俊前参議が来た。武蔵堀池に關する上皇様直筆の書状を持ってきた。綾小路前参議自らが伏見宮家へ持って行くようにとのご命令だという。上皇様の書状は、「武蔵堀池の管理の職を明盛にお命じ下されば、とてもうれしいです」という内容だった。

ここまでくれば、もう、とやかく言うてはいられない。「明盛を武蔵堀池の現地管理者に任命します」という返事を書いた。正式な命令書の形で任命書を下さいと明盛は希望してきそうだ。しかし、女房奉書の形で、しかも略式の折紙の形にして書き与えた。

### 生島明盛への批判

領地と父親との関わりなどから、役職を希望するのは問題のないことだ。しかし領主である伏見宮家へ何の相談もなく、いきなり上皇様へ直接申し入れをして命令書をもらうというやり方は、よくない。綾小路前参議に、明盛をきつく叱っておくよう、命じた。今後はいよいよご奉公に励みますからと、明盛がしきりに武蔵堀池の現地管理者の職を望んだそうだ。

これで、勝阿に預けていた領地がなくなってしまうのは、とてもかわいそうだ。

綾小路前参議は、すぐに京都へ戻った。上皇様への返事を今日中にお渡しすることだった。

十三日、曇。とても寒い。夕方に雪が降り、六センチから九センチほど積もった。勝阿が一献のお酒を持って来た。「武蔵堀池の事については上皇様の介入があつては、どうしようもなかった。私に政治力がなく、上皇様へ反対意見を言えなかった」と勝阿に話した。



## 髪置きのお祝い

さて私の娘が二歳になった。通例通り、髪置きのお祝いをした。数日前、田向三位が賀茂在弘に吉日を占わせておいた。田向三位が髪置きを儀式を取り仕切ってくれた。その後、一献が三巡する祝宴をした。

さて今日の夕方、室町殿の若君が朝廷や上皇御所へ出仕することだ。厳粛な儀式だという。

また今日、大光明寺前住職の徳祥和尚が天龍寺に入ったそう。徳祥和尚住職就任の仏事には、室町殿も参列されたという。

十四日、雪が深く積もり、景色に趣がある。対御方の局女・別当尼公が一献のお酒を少し用意してきた。御前に呼んで、酒を飲ませた。

## 足利義量、朝廷や上皇御所へ出仕する

さて、昨日、室町殿の若君足利義量が上皇御所へ行った様子について、話を聞いた。午後十一時半、まず朝廷へ出仕した。若君の服は平常服の直衣(のうし)で、袴の裾が括つてあつたという。室町殿も直衣で付き添われた。その場で、一条経嗣関白・徳大寺公俊左近衛大将・西園寺実永右近衛大将ら大勢が付き従つた。現任の公卿ほぼ全員揃つたという。ただし今出川公行左大臣と九条満教右大臣は欠席した。殿上人は数人がお仕えした。

## 関白以下が列立し、蹲踞して出迎える

朝廷の四足門の外で関白以下が居並んで出迎えた。若君が門を通り過ぎるとき、関白たちは両膝を折つてうずくまり、頭を垂れて敬礼した。台所から清涼殿に上がったという。四足門の外で関白以下が居並んで出迎えるのは、室町殿が初めて朝廷に出仕するときの先

例なのだという。

天皇陛下の御前で三献の酒宴があり、その後すぐに退出した。次に若君は徒歩で上皇御所に向かった。公卿や殿上人たちも皆お

供した。ただし一条関白だけは早退したそう。徳大寺左大将・西園寺右大将以下は全員、お供した。上皇様の御前でも同様に三献の酒宴があつたという。

室町殿の奥方以下、幕府御所の女性たちが大勢来て、長橋局のお部屋へお立ち寄りになつた。長橋局は一献の酒宴や引き出物を用意して待つていたそう。

天皇陛下へはお土産として銭百貫文を差し上げたそう。今出川左大臣は差し支えがあつて欠席したそう。今出川公富中納言はお供したという。

十九日、晴。来年の暦二巻と占いの本などを、陰陽師の賀茂在弘が献上してくれた。

今日は、雅楽や和歌の百日間稽古の最終日である。今出川家へ百日間毎日詠んできた和歌を書き送つた。妙音天へ秘曲を奉納した。黄鐘調の曲八つと丘泉二手などを弾いた。田向長資朝臣は風邪だと云つて、合奏を断つてきたので、自分一人で演奏した。長資は音楽への関心が全くないよう。

二十日、曇。大光明寺にお参りして焼香した。対御方・近衛局も同道した。その後、一緒に指月庵へ行き、少ししてから帰つた。

## 天龍寺徳祥和尚とその兄の話

天龍寺長老になつた徳祥和尚が来た。大光明寺から転出して以後、退任の挨拶を言いに来たという。面会して、しばらく話をした。



長老の兄が関東にいて、建長寺の長老になったそう。徳祥和尚が天龍寺長老に就任した日に、兄に建長寺長老就任の任命書が出されたという。兄弟が同時に長老になったことは今までに例がない。「名誉なことです」と徳祥和尚はお話しになっていた。

### 芳徳庵主の来臨

二十一日、晴。芳徳庵主が来た。お土産として一献分のお酒を持って来た。初めてお目にかかった。一献が数献となり、朗詠や雑芸などをした。とても喜ばれ、その後、和歌をお詠みになった。

敷島の 道のしるべは迷ひつつ 八十の老いの年は ふれども  
庵主がこうお詠みになったので、私と田向三位も同じく詠んだ。

### 私の詠歌

今よりは 千歳の友と 頼みなん

しるべともなれ 和歌の浦人

### 田向三位の詠歌

和歌の浦や 古き道知る 友千鳥

跡も絶えせぬ 君をこそ問へ

各々詠み終わってから、和歌を披露した。何回も声に出して詠んだ。芳徳庵主がお話しになったことによると、先日、室町殿が清和院にお籠もりされている時に呼び出されたので、同院へ行き室町殿とお会いになったそうだ。和歌を詠みなさいという室町殿のご命令だったので、即座に次のように詠んだそうだ。

君ならで 誰か情けを かけまくも

賢き御代を 仰ぐならでは

六の道 迷はじとこそ 頼みつれ

今さへここに しるべ楽しき

六道の詠歌は、清和院へ来たので、地藏菩薩のお導きのお心を述べたものと庵主は説明した。室町殿はすばらしい歌だと感動なさり、錢三十貫文を芳徳庵主にお与えになった。

その上、「何か希望することがあれば、何なりと申し入れよ」と室町殿は仰ってくださいました。酒宴が終わってから、お帰りになった。

二十二日、晴。薪を燃やす会をした。今上臈局が当番としていつものように薪を用意した。今夜は節分である。いつものようにお祈りをした。

二十三日、「立春の良い時期を迎えた。すべてに良い兆しがあり、たいへん幸せだ」と予祝した。天気は既に暖かく、年末であることを忘れてしまうほどである。いつものようにお祈りをした。田向三位・田向長資朝臣が一緒に祈った。

さて明盛が綾小路信俊前参議の手紙を持って、やって来た。「先日は、武蔵堀池の管理者に任命していただき、恐れ入ります。これまでのお仕えいたしたく存じます。最近、宮家へお伺いしていなかつたので、お許しをいただき、お仕えいたします」という挨拶だった。綾小路前参議の手紙の内容もほぼ同じことだった。酒樽なども持って来た。

「任命書を与えた上は、宮家に仕えることに問題はない」と言っただけで、すぐに御前に呼んで、一献の酒を飲ませた。このところの不義はよろしくない事だが、上皇様のお口添えがあり、また明盛

は何代も続く家司でもあるので、許したことに問題はないだろう。

### 法安寺長老良禪上人の死

さて聞くところによると、法安寺長老良禪上人が今夜午後七時に亡くなったそうだ。八十歳である。長年住職を勤めてくださったっており、とても不憫なことである。法安寺の住持職や遺産などは、良明房が相続することになっている。

### 伏見荘堤田

二十四日、曇。伏見荘堤田一反を退蔵庵に寄付した。この田の租税で六条殿御影供の供物を差配なさるよう、退蔵庵に申し付けた。これまでは、法安寺の田地を六条殿御影供のための領地にしていた。それを入江殿に渡してしまったため、その代わりとして寄付したのである。

今夜、薪を燃やす会で、田向三位がいつものように薪を用意した。二十五日、雨が降った。年末のご挨拶として、上皇様へ書状を書いた。それを冷泉永基朝臣から上皇様へ渡してもらうことにした。

### 室町女院領備中国大島保

二十六日、晴。町経時治部卿が一献分の酒を持って来た。室町女院領備中国大島保四分の一を母尾高山寺の経増律師に管理させていた。

しかし、問題があつて、その領地を取りあげていた。それで、町経時朝臣に備中国大島保全体を管理させるよう、大通院が内々に命令なさっていたという。しかし、いまだその命令書をいただいているので、今日、正式な書類の形で命令書を下さいと言ってきたのだ。大通院の時代からの約束なので、問題はない。それで田向長資朝臣に正式な命令書を書かせて、町朝臣に与えた。

町朝臣には会ったことがないので、御前に呼んで面会した。殿上の間で一献の酒を与えた。その後すぐに出ていった。

西大路隆富朝臣が年末の挨拶に来て、すぐに帰った。

田向三位を京都へ行かせた。室町殿や鹿苑院主らへ歳末の挨拶をしてくるよう、命じたのである。

二十七日、晴。室町殿へ関白以下諸門跡寺院などから、年末ご挨拶の使者が群れ集まっていたそうだ。

今夜は、諸国からの貢ぎ物の馬を天皇陛下がご覧になる儀式がある。

二十八日、雪が深く降り積もった。しかし、雪見酒はしなかった。ただただ寒かった。田向三位が帰ってきた。

### 幕府將軍への書札礼

私から室町殿へ書状をだしたことがなかったので、書状末尾の書き止め方を常宗に尋ねた。「関白から室町殿へ出される書状では『誠恐謹言』と書き止められています。室町殿から関白宛の書状も同様です。相互にこのように書き止めなさっているのです、これに準拠して書状をお出しになればよろしいのではないのでしょうか」と教えてくれた。

### 伏見荘上立の公事免除地

さて田向三位が、伏見荘上立の公事が免除された土地一反を下さいと申請してきた。そしてその土地を光台寺に無期限に売り渡したいと言う。そしてその代わりに、これまでいただいた御恩地の租税五分の一にあたる分を増額して、毎年、宮家へ納めますというのである。

だいたい、領地を売るなどというのは、よくないことである。それに御恩地の内といっても、毎年納入される額も一定していない。いづれにしても承認できないと答えた。しかし再三言ってくるので、仕方なく了承して、伏見荘上立の公事免除地一反を渡す命令書を出してしまった。自分勝手な申し出で、とてもよろしくないことだ。二十九日、雲が未だ晴れない。風呂に入った。年末のお浄めである。

**伏見荘延光名の名主職得分**

さて綾小路信俊前参議を通して、甘露寺兼長前大納言が連絡してきた。伏見荘延光名の名主職に関して、延暦寺僧の承操という者が申し上げることがあるそうだ。それで訴状と証拠書類などをお取り次ぎします、とのことだった。

承操のことは聞いたことがないので田向三位に尋ねたところ、「名主職ではなく、そのうちの三分の一の得分の所有者でした。しかし問題がでてきたので、承操の得分は没収しました」とのことだった。あらかじめ私に伺いを立てず、単なる事務担当者として田向三位が勝手に処理したのはよろしくない事である。ただ、承操の訴えに無理があることは了承できた。

そのような事情を綾小路前参議に伝えた。そしてそのことを甘露寺前大納言にも伝えるように言い添えた。

陰陽師の土御門泰継朝臣が来年の暦を送ってきた。蔵光庵主がいろいろの物を献上してきた。これは蔵光庵主の毎年のお志である。

今出川家から手紙が来た。今度の正月三が日に今出川公行左大臣が上皇様と一緒にお屠蘇を飲む役をする事になったこと、今出川公富が中納言になったこと、親族の拝礼など、いろいろと厳しく朝

廷から出仕を命じられているので、慌ただしくしていますとのことだった。

晦日、今日で暦も巻き尽くした。慌ただしく忙しいだけの一年だった。年末の挨拶に寺庵の僧たちがやってきた。大光明寺の長老も来た。各々と面会した。大晦日に僧たちが挨拶に来るのは不作法だが、近年はどこもこのようになっていっているようなので、良い例というべきなのだろうか。

**播磨国国衙領の年貢納入**

播磨国国衙領の年貢二十貫文と播磨国の特産物などを勧修寺経興が献上してきた。めでたいことである。

除夜のお祝いをした。田向三位と田向長資朝臣がお祝いに参加した。「明くる春もすべてが満足で、とても幸せだ」と予祝した。

伏見宮家の雑事を詳しく記してきた。後世の人が見るのは差し障りがある。しかし、後日になって自然と分からないこともでてくるだろうから、詳しく記録したのである。私の死後は燃やすべきである。

毎月恒例の連歌懐紙を後で見返すために、順番を乱さないように紙継ぎをした。散らばってなくならないように、この連歌懐紙の裏に日記を書いた。

（続）

『看聞日記』現代語訳（五）（『山形県立米沢女子短期大学紀要』五一号、二〇一五年）正誤表

ご指摘下さった橋本素子氏に感謝します。

閏五月十六日条注記

（誤）

※非茶（ひちや）…本場で栽培した以外の茶のこと。室町時代では宇治茶以外の茶をいう。

（正）

※非茶（ひちや）…榎尾高山寺茶と宇治茶以外のお茶のこと。

以上